

# デザインは手からはじまる —磯田尚男 デザインと教育—

Design begins with the hands.  
ISODA Hisao Design and Education

---

川上 真由子

KAWAKAMI Mayuko

ISODA Hisao (1932-2020) was a designer who worked in a wide range of fields, including book bindings, costumes, stamp designs, and posters. From 1969 to 1997, he taught in the Department of Design at the Faculty of Fine Arts.

Exhibition "Design Begins with the Hand: The Genealogy of Design at Aichi University of the Arts: ISODA Hisao " will be held at the university's Satellite Gallery SA-KURA from November 5 to 20, 2022, two years after his death.

In one of his works, Isoda was involved in the publication of a textbook by sculptor SATO Churyo and ANNO Mitsumasa, a painter, picture book author, and bookbinder. He wrote the design page, and we can read about his ideas on design at that time and the state of art education.

## 1. はじめに

磯田尚男 (1932-2020) は、創立間もない1969年から1997年まで本学美術学部デザイン専攻で教鞭をとり、本の装幀、狂言の衣装、郵政省の切手デザイン、ポスター等、幅広い分野で活躍したデザイナーである。

東京に生まれ、東京藝術大学を卒業の後、フリーのデザイナーとして研鑽を積む傍ら女子美術大学で講師を務め、1969年愛知県立芸術大学助教授に就任。1974年からは教授を務めている。デザイン専攻では、自由闊達な精神とデザイン思想 (磯田イズム) をひろめ、グラフィックデザイナーだけでなく、イラストレーター、木工家、写真家、染色家、版画家、画家等、各界で活躍する多くの優れた人材を輩出した。

しかし、磯田の功績についてまとめられたものはなく、広く内外に紹介する機会もなかった。そこで、逝去から2年となる2022年11月5日から20日にかけて、本学サテライトギャラリーSA・KURAで展覧会「デザインは手からはじまる 愛知芸大デザインの系譜—磯田尚男—」を開催。磯田の幅広いデザイナーとしての仕事や、「先生」として慕われ、多くのクリエイターを育てた一面も含め、手仕事によって生まれた数々の作品と共に紹介した。筆者は、本人に直接お会いして話を伺うことは叶

わなかったが、本学の収蔵作品である《出会う》(図1)のシリーズを展示した経験より、磯田作品に強い感銘を受け、この展覧会の発案に至った。

事前に展示作品の選定を行っている中で、筆者の目に留まったのが、彫刻家佐藤忠良(1912 - 2011)と画家や絵本作家、装丁家として活躍した安野光雅(1926 - 2020)によるあたらしい教科書の発刊に携わったことである。この教科書は当時、ハードカバーの表紙であることや、図版よりも文字の方が多く「読む教科書」と呼ばれるなど前衛的なものとして評価されていたが、採択数が少ないなど、教科書を取り巻く環境も含め議論を呼んだ。磯田は、装丁やデザインの頁の執筆を担っている。執筆者や携わったすべての人の思いが込められているこの教科書には、当然執筆を担った磯田のデザインに対する考え方や、美術教育の在り方についても読み取ることができる。



図1 《出会う「MAORI」》

## 2. デザインは手からはじまる 愛知芸大デザインの系譜—磯田尚男—

### 2.1 展示作品

展覧会「デザインは手からはじまる 愛知芸大デザインの系譜—磯田尚男—」(図2)では、本学の収蔵作品《海潮音(春)、(春夏)、(夏)、(秋冬)、(冬)》(2005)、イラストレーション《出会う》シリーズと共に、鎌倉のアトリエからお借りした作品を合わせ40点ほど展示した。アトリエには、まだたくさんの作品が手つかずの状態に残されており、展覧会開催にご尽力いただいた磯田の教え子たちによって整理され、作品の選定にあたった。郵政審議会の専門委員も務めたほど深く関わっていた切手のデザインや文学や狂言などをモチーフにしたデザインなど代表的な作品に加え、NHKの『婦人百科』等に連載を持つ磯田は、エッセイストとしても知られており、それらをまとめた書籍やエッセイ、昔は手作業で行われていた雑誌の校正紙なども展示している。また、植物や車が好きだったというエピソードを思わせるスポーツカーのイラストの数々や植物のデッサンなど、遊び心もありながら、デザインのアイディアとなりそうなものもお借りすることができ、手仕事を大切にしていた磯田のデザイン観が垣間見えた。

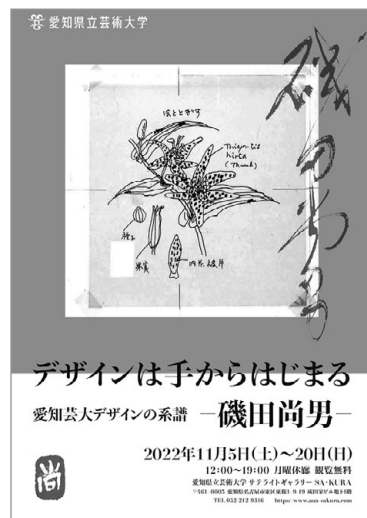


図2 展覧会チラシ

また、卒業生たちによる冊子『磯田尚男の仕事(1932-2020)』上梓され、磯田の功績を俯瞰的に展観するものとなった。

### 2.2 公開講座「デザインは手からはじまる～磯田尚男の薫陶～」

また、2022年11月12日には、学内において、公開講座「デザインは手からはじまる～磯田尚男の薫陶～」を開催。講師として、卒業生であり、磯田と深いかかわりのあった白木彰名誉教授と加藤芳夫

元客員教授を迎え、当時の思い出や作品について伺った。先生としての磯田の印象は、「いつもにこにこしていた」や「よく怒られていた」など人によりさまざまで、授業方法も朗読の時間があったりするなど独特のものだったという。そして、磯田はグラフィックデザイナーの前に文人であると自分のことを評するなど、文学や言葉がいつも磯田の仕事の背景にあったことが伺える。

また、磯田は一時期、生物学者の服部廣太郎博士が開いた美術学校「服部学園」<sup>1</sup>で働いていたという。服部学園は、戦後間もない時代に、「自身の生物学研究を通して、モノの豊かさのみを是とせず「世界に文化で貢献する」日本を創ることこそが真に平和な世界を築くことになる」と<sup>2</sup>という信念のもとで設立された。磯田は服部から「観る」ことの重要性を学んだといい、後に本学で教鞭をとる際にも、学生たちにものをよく観察することを説いた。生涯を通して自然を愛し、「観る」ことを常に意識していた磯田の礎がこの頃に育まれたと考えられる。

そして、学内でのエピソードとして、非常勤講師として呼んだ安野光雅とのやり取りをあげた。最初の授業中、芸祭の準備で疲れた学生たちが居眠りをしていたことに腹を立てた安野を次の年も続けて招聘し、丁重にもてなしたことで、一緒に仕事をする仲になったというものである。その一つが磯田も関わった教科書づくりだったと言える。

### 3. あたらしい教科書の編纂に向けて

#### 3.1 現代美術社によるあたらしい教科書

美術関連書籍を手掛けていた現代美術社（以下、現美）社長の太田弘は、安野と彫刻家の佐藤に声をかけ、小学校の図画工作教科書『子どもの美術』（昭和55～平成7年度）、中学校の美術教科書『少年の美術』（昭和56～平成8年度）、高校の『美術・その精神と表現』（昭和57～平成14年度）の出版に尽力した<sup>3</sup>。もともと太田は大手の教科書出版社に在籍し、安野と佐藤もそれぞれ教科書づくりに携わった経験があった。太田は、大手出版社を退社後、現美を設立。教科書会社の熾烈な営業活動に疑問を持ち「知識を授けるのではなくて、心を育てる教科書を創りたい」<sup>4</sup>という目標のもと、安野や佐藤らと共に、あたらしい教科書の発刊を実現したという。その現美の教科書に最初から参加しているのが磯田である。

『子どもの美術』で磯田は、奥付に「この本をデザインした人」として紹介されており、装丁を担当したことが分かる。『子どもの美術』は、当時、採択ゼロといわれるほどの採用数の少なさ<sup>5</sup>や装丁・内容がほかの教科書とは異なる点などが話題となった。また、『少年の美術』と『美術・その精神と表現』で磯田は、デザインの頁の執筆を行っている。

#### 3.2 学習指導要領における「デザイン」

そもそも教科書は文部科学省が告示する学習指導要領に従って制作される。学習指導要領はほぼ10年に1回改訂され、検定はおおむね4年ごとに実施されている。現美の教科書は、改訂版が出るたびに表紙のデザインや仕様も変わった。最初、小中高の教科書は、四角いハードカバーの仕様だったが、角がなくなったり、ソフトカバーに変わった年もあった。特に、現美の教科書の特徴であるこの分

厚い表紙が生まれたことについて佐藤は、「子どもの手のひらに、本との出会いの手ざわりを与えたい、教科書に存在感を持たせよう、としてやった」<sup>6</sup>と述べている。また厚紙は画板にもなるからいいとも話している。

小中学校では「図画工作」、「美術」は必修教科だが、高校になると、「芸術」とひとくくりになり、「音楽」「美術」「工芸」「書道」のうちのどれかを選択することになる。高校の美術では、「原則として「美術概論」、「素描」及び「基本造形」が含まれるようにする」<sup>7</sup>とあり、それぞれの出版社が内容を自由に選択できるようになっている。

学習指導要領に「デザイン」が登場したのは小中学校の昭和33年の改訂、高校では昭和35年から初めてデザインという言葉が登場する。それまでは「図案」という呼び名が一般的だったが、日野永一による「デザイン用語の変遷」<sup>8</sup>で当初は服飾関係に使用されていた「デザイン」という語が、1950年代高度経済成長期とともに一般に普及したことを指摘する。昭和52年の小学校学習指導要領では

これまでの内容は、絵画、彫刻、デザイン、工作及び鑑賞の5領域に区別していたが、これらは専門の造形芸術の分野の分け方に近く、このため実際指導において内容が高度化したり、過密化する傾向があった。そこで、これを改め、内容は児童の活動の実態に応じ、「表現」及び「鑑賞」の2領域に区分して示した。(中略) デザインでは、低学年の知らせる目的でつくる内容を削除し、色や形の組合せや組立ての内容は、全学年を通じ、表現の領域の内容に吸収させ軽減した<sup>9</sup>。

とあり、デザインという概念よりも色や形の組み合わせを「表現」として学習させることにより、デザインと他の領域との横断的な学習に移行したと言える。また、続く中学校の改訂では、小学校図画工作科との関連を図った指導が望まれているとする。その上で、

小学校図画工作科及び高等学校芸術科(美術、工芸)と同様、実際の指導において有機的・総合的な指導が行われやすいようにするため、「表現」及び「鑑賞」の2領域に整理統合した(中略)

(5) デザインに関する内容については、「色、形などによる構成」は、美術科の内容のすべてにかかわり、美的構成の基礎能力となるものであるので、「伝達のためのデザイン」と並立して示した。「使用のためのデザイン」の内容は工芸製作との有機的な指導が行われやすいように改めた。また、「環境のためのデザイン」は、範囲が広がり過ぎ、その取扱いの程度が高くなるので、「表現」の領域から削除した<sup>10</sup>。

中学校の学習でも美術は、「表現」と「鑑賞」二つの領域に統合され、小中学校9年間を通じて、色や形による造形構成を基礎とし、小学校で「知らせる目的でつくる内容」が削除されが、中学校では「伝達のためのデザイン」として発展させている。デザインの基礎でありながら美術の内容のすべてに関わるものとして取り扱われていることが重要といえる。

最初はデザインという言葉自体の意味をとらえるために、いろいろな分類によって多角的な学習を

求めたが、昭和52年の改訂では、内容をより凝縮し、色と形による構成でデザインをとらえることに特化した。以上のように、当時の小中学校の学習指導要領は、デザインの指導方法に試行錯誤を繰り返していることが分かる。

### 3.3 あたらしい教科書を求めて

では、当時使われていた現美以外の教科書を見てみよう。なお『子どもの美術』が出版された当初、小学校の教科書は現美を合わせて5社あった。その後刊行された中学の美術は4社、高校は3社しかなかった。

当時、小中学校の教科書で一番多く使われていたのは、日本文教出版（以降、日文）の『図画工作』と『美術』でそれぞれ69.4%、74.7%<sup>11</sup>と全体の70%ほどを占めていた。まず、一番採択数の多い日文の中学校美術教科書『美術1』のデザインの頁（図3）を見てみると、「色彩と平面構成」が最

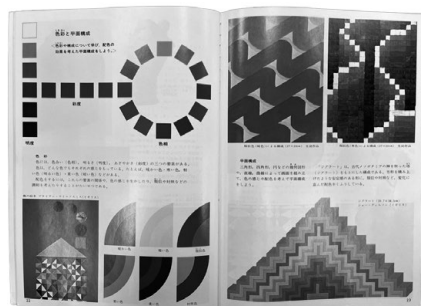


図3 「色彩と平面構成」『美術1』

初にあり、色相環を使った色彩と色による平面構成の説明がなされている。続いて、「自然物や人工物をもとにした構成」「文字とマーク」へと進むようになる。また、開隆堂出版の『美術1』でも「色や形の構成をする」「レタリング」「さし絵」「身近な材料の性質を生かして作る〈1〉日用品の美しさ」と続く。

そこでまず注目すべきは、現美以外の教科書の構成がほぼ似通っている点である。日文の目次には「表現」の中に「デザイン・工芸」という項目があり、その他の2社の教科書も文言が多少違うものもあるが、ほぼ同様な内容になっている。これは、学習指導要領に出てくる「色、形などによる構成と伝達のためのデザインができるようにする」と「用途や材料をもとにして、つかうためや飾るためのデザインをし、工芸の製作ができるようにする」<sup>12</sup>に対応したものと言える。

一方で、現美の教科書『少年の美術』の目次には、絵画やデザインという分類分けはなく、まず、その概念を説明する文章を導入とし、それから具体的な内容に進んでいくようになっている。デザインに関連したページでは、「デザインとは何だろう」というエッセイにはじまり、「物とつきあう」「割箸をつくろう」「箸の話」「紙を使って」「木の生命」「丸太を割って」「縞を作ろう」「見たてる」となる。これらのタイトルから見ても、他の教科書との違いは大きい。

しかし、高校の教科書になると、それまではなかった「絵画」と「デザイン」、「彫刻」という分類が登場する。中学までの教科書とは違い、美術というものを体系的に捉えるだけでなく、それぞれが専門的な分野として位置づけているからではないだろうか。また、他の教科書は、日文の『高校美術1』がB5判、それ以降はA4サイズ、光村図書出版は全てA4であるにも関わらず、現美の教科書はB4版でハードカバーの表紙のため、かなりの大きさと硬さがある。そのため、見開き頁の全面に絵画が配置されるなど図版も充実させている。

分類分けを行わない中学までの現美の教科書で美術は、デザインや絵画、彫刻、版画などがそれぞれ互いに関連しあうものであり、佐藤が「美術を学ぶ人へ」という文章で示すように「感ずる心を育て



る」<sup>13</sup>ことを目標にしたものであることが読み取れる。一方で、高校では、それまでの経験や知識を使って、デザインという枠の中で表現していくことを目指したと言える。磯田も、「一つのイメージから、また別の新しいイメージをわかせるような、柔軟な思考と表現の訓練が大切であろう」<sup>14</sup>と述べているように、美術という枠を超えて、これから生きていく上で重要な思考を育もうとしたものだと考えられる。

以上のように、同時代の教科書との比較で、現美の教科書はいろいろな点で、「あたらしい教科書」でることがわかった。なお、この内容で検定に通っているということは、もっといろいろなパターンの教科書があっても不思議ではないと思われる。しかし、当時の太田や佐藤、安野が危惧するように、どれも似通った内容の教科書があふれ、それが本当に子どもたちのためになるのかという疑問につながったと思われる。

## 4. 磯田尚男の美術教育

### 4.1 デザインとは何だろう

佐藤は、まず『子どもの美術』をつくるにあたって、「私たちが抱いている教育理念、哲学を、素直に子どもへ語りかけようと決めたのです。」<sup>15</sup>と述べているように、現美の教科書には必ず、それぞれの学年に対する語りかけから始まる。それは、中高の教科書にも引き継がれた。

中学生向けの『少年の美術1』と高校の『美術・その精神と表現1』のデザインの最初には、「デザインとは何だろう」という問いかけからはじまる。

中学版(図4)では絵本『ノウムズ(小人たち)』(日本語版では『ノーム』)の火おこしをする挿絵を使用し、



図4 「デザインとは何だろう」  
『少年の美術1』

生活をもっと快適にするために、みんなで協力し、住む家、身につけるもの、食事用具といったものを、一つ一つ失敗しながら作ってきた。デザインとは、本来そういう行為や作業のことである。(中略) 品物や道具は、それを必要とした人びとの意志や望みが形になってあらわれている。人間の生活に役立ち、いつまでも大切にしたいくなるような、心にふれるものだったら、それはすぐれたデザインといっていいいだろう<sup>16</sup>。

と述べている。デザインとは生活の中から生まれたもので、失敗しながらより良いものを作り出してきたと磯田は説く。また心にふれるかどうか大事な要素だという。



図5 「デザインとは何だろう」  
『美術・その精神と表現1』

高校版の「デザインとは何だろう」(図5)では、「フォーク」の成り立ちからデザイン本来の意味を導き出す。記名ではないが、奥付に佐藤と磯田、高校の教諭である東京都立雪谷高等学校教諭の阪本文男の3人が執筆者となっており、阪本は高校の教員をしながら画家としても活躍した阪本文男(1935-1986)であると考えられることから、デザインは磯田自身の執筆によるものと言える。

「デザイン」という概念に対し磯田は、中学の場合とは異なり、「もともとデザインとは、品物の名前ではない。仕事の名前である。(中略) 姿形になるまでの工夫、計画、試作といったプロセス(過程)のことをというのである。」<sup>17</sup>と、もう一步踏み込んでデザインを説明する。また、「本来、デザインという言葉はラテン語に始まり、美術活動に欠かせない準備段階をさす言葉だった。」<sup>18</sup>と言い、磯田は「デザイン」は美術、そしてあらゆる創作のもととなるものだとする。「デザインとは何だろう」という問いかけに対し、デザインを教えることは、美術教育のすべてにつながり、ひいては生活のあらゆる場面で必要なものだと考えていたことが分かる。

## 4.2 デザインと教育

『美術・その精神と表現3』で磯田は、「デザインへの道」というタイトルのエッセイを載せている。その中で、デザインを志す学生に向けて、次のように述べている。

確かに表現力は身につけたいが、どうにも思うにまかせぬという人も多いことだろう。(中略) 解決する道は、実は一つである。”描くこと“である。(中略) 目についた物、気になった物、身の周りにある品物などを、何でも描きとめるという意味である。(中略) 何が、どうなっているかを、ためつすがめつ調べながらきちんと描きとめる。こういう作業をたくさんやる<sup>19</sup>

これは、磯田が日々行っていたことと呼応する。本学の展覧会でも数多くのスケッチが収められたファイルを展示した。このファイルには、植物や身の回りのことなどが描かれ、そのものの形状や事柄が細かく書き込まれていた。これはほんの一部であり、アトリエには未整理のデッサンやスケッチが多く残されており、日々気になったことなどを絵入りのメモとして書き記した。

そこには、磯田の教育観とも合致する部分があったと考えられる。教員用の教科書教授資料の中で磯田は、「デザインは、絵画・彫刻と並べて平面的に分割されたジャンルの一つではない〔。〕したがって今のデザイン教育はまちがっているのではないか」<sup>20</sup>〔。〕は筆者)という。そして、次のような文章を寄稿する。

デザインの授業は、新鮮な感受性、発色や驚きやのレーダーを磨くためにあるべきです。思いもしなかった事や物に心を揺さぶられること。それは精神の活性化であります。そのいちいちが「美術」にむすびづかなくても結構、むしろ日常茶飯事に直結してほしいわけです<sup>21</sup>。

デザインを学ぶことは、日々の生活で様々な発見をし、豊かな生活を送ることに結び付くという、

磯田のデザイン観をよく表したものだと言える。花や木、日常にあふれるありとあらゆるものに関心を持ち、観察する。これこそが、磯田のデザインであり、教育であると考えられる。

## 5. おわりに

以上のように、サテライトギャラリーSA・KURAでの展覧会と共に、磯田が携わった教科書から、デザインと教育について考察を行った。その当時、比較的新しい概念であった「デザイン」という言葉を教育の現場に取り入れるため、試行錯誤が繰り返されていた。その一番基礎となる教科書に、磯田たちは新しい風を送り込もうと奔走する。磯田は、教える立場でもあり、デザインを生み出す側という両方の立場にあり、それを一番近くで感じていたと思われる。

磯田の作り出すものは、いつも自然や身近にあるものの観察から生まれたものである。言葉も同様に、デザインや美術以外の様々なものに触れる中で、思考されたものだと考える。こうした、磯田そのものの生き方がデザインであり、多くの学生に慕われた所以であろうと思われる。

今回は、デザインと教育というテーマで、現美の教科書を取り上げたが、紙面上一部しか紹介できていない。特に、小学校向けの『子どもの美術』に関する研究は、多方面で行われているが、中学高校向けの教科書は、あまり例がない。これらは、非常に短期間で終わってしまったものではあるが、現代の教育にも繋がる貴重な視座を与えてくれるものと言えるため、これからも研究を続けていきたいと考えている。

## 磯田尚男(皓) 略歴

- 1932年 東京都生まれ
- 1955年 東京藝術大学美術学部卒業
- 1956年 東京藝術大学専攻科修了
- 1965年 磯田デザイン研究室設立
- 1969年 愛知県立芸術大学美術学部助教授
- 1975年 愛知県立芸術大学教授
- 1996年 愛知県立芸術大学芸術資料館長
- 1997年 退任/愛知県立芸術大学名誉教授
- 2001年 尾道大学(現尾道市立大学)芸術文化学部教授
- 2008年 尾道大学(現尾道市立大学)退任

## 謝辞

展覧会「デザインは手からはじまる 愛知芸大デザインの系譜—磯田尚男—」及び、公開講座「デザインは手からはじまる～磯田尚男の薫陶～」において、ご遺族、多くの卒業生の方々には多大なるご協力を賜りましたこと、ここに記して深謝申し上げます。



## 註

- <sup>1</sup> 現在、学校法人服部学園には御茶の水美術専門学校、御茶の水美術学院、artgymがある
- <sup>2</sup> OCHABI“建学の精神” <https://www.ochabi.ac.jp/statement/> (参照2023/10/30)
- <sup>3</sup> ただし、高校の教科書については、安野は執筆者に入っていないため、関わっていたのは小中の教科書までと考えられる。佐藤と安野による『若き芸術家たちへ―ねがいは「普通」』の中で、安野は表紙絵は続けたが途中で退いたという話がある。。
- <sup>4</sup> 太田弘「教科書のあり方を考える―美術教科書「ゼロ採択」の体験から」『法学セミナー増刊、総合特集シリーズ;17 (特集・教科書と教育)』日本評論社編、1981年11月、p155
- <sup>5</sup> 研究代表者 中村紀久二『教科書の編纂・発行等教科書制度の変遷に関する調査研究:平成7年度~平成8年度科学研究費補助金(基盤研究B(1) 研究報告書)』による調査によると、昭和55年に発行された『子どもの美術』の占有率は全体の0.1%、58年は0.4%、61年は1.2%、平成元年は0.9%であった。一方で、中学の教科書は、昭和56年に2.5%、59年は2.4%、62年3.8%、平成2年2.7%、5年は3.2%であった。
- <sup>6</sup> 佐藤忠良『子どもたちが危ない―彫刻家の教育論―』岩波ブックレットNo.41、岩波書店、1985年、p.60
- <sup>7</sup> 文部省「高等学校学習指導要領小昭和53年(1978)改訂版 <https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s53h/chap1.htm> (参照2023/10/30)
- <sup>8</sup> 日野永一「デザイン用語の変遷」『デザイン学研究』1984巻45号 pp.18-26 [https://doi.org/10.11247/jssdj.1984.18\\_1](https://doi.org/10.11247/jssdj.1984.18_1) (参照2023/10/20)
- <sup>9</sup> 文部省『小学校指導書 図画工作編』日本文教出版、昭和53年
- <sup>10</sup> 文部省『中学校指導書 美術編』開隆堂出版、昭和53年
- <sup>11</sup> 研究代表者 中村紀久二『教科書の編纂・発行等教科書制度の変遷に関する調査研究:平成7年度~平成8年度科学研究費補助金(基盤研究B(1) 研究報告書)』1997、p110
- <sup>12</sup> 文部省「中学校指導要領 付学校教育法施行規則(抄) 中学校学習指導要領等の改訂の要点」昭和52年7月 <https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s52j/index.htm> (参照2023/9/28)
- <sup>13</sup> 佐藤忠良ほか6名『少年の美術1』現代美術社、昭和56年、p.4
- <sup>14</sup> 佐藤忠良(ほか)編『美術・その精神と表現2:教授資料』現代美術社、1999年
- <sup>15</sup> 佐藤忠良『子どもたちが危ない―彫刻家の教育論―』岩波ブックレットNo.41、岩波書店、1985年、p.57
- <sup>16</sup> 磯田尚男「デザインとは何だろう」『少年の美術』1981年、現代美術社、p.27
- <sup>17</sup> 佐藤忠良ほか2名『美術・その精神と表現1』現代美術社、昭和59年、p.22
- <sup>18</sup> 同上
- <sup>19</sup> 佐藤ほか、禅掲、昭和59年、pp.58-60
- <sup>20</sup> 佐藤忠良〔ほか〕編『美術・その精神と表現2: 教授資料』現代美術社、1999年、pp.128-129
- <sup>21</sup> 同上、p.129

## 参考文献

- 太田弘「教科書のあり方を考える―美術教科書「ゼロ採択」の体験から」『法学セミナー増刊、総合特集シリーズ; 17 (特集・教科書と教育)』日本評論社編、1981年11月
- 加藤芳夫、白木彰、松森雅孝、山田晃三企画・制作・編集『磯田尚男の仕事(1932-2020)』大熊整美堂、2022
- 佐藤忠良『子どもたちが危ない:彫刻家の教育論』岩波ブックレットNo.41、岩波書店、1985年
- 佐藤忠良・安野光雅『若き芸術家たちへ―ねがいは「普通」』中央公論新社、2011年
- 西郷南海子「『子どもの美術』の編集経緯と採択の壁―「商品ではない教科書づくり」の挑戦」『教育史フォーラム』第9号、pp.61-82
- 日野永一「デザイン用語の変遷」『デザイン学研究』1984 巻 45 号 pp.18-26 [https://doi.org/10.11247/jssdj.1984.18\\_1](https://doi.org/10.11247/jssdj.1984.18_1) (参照2023/10/20)

---

## 掲載画像

図1 磯田尚男《出会う「MAORI」》愛知県立芸術大学蔵

図2 展覧会「デザインは手からはじまる 愛知芸大デザインの系譜—磯田尚男—」チラシ

図3 倉田三郎、小池岩太郎、桑原実ほか23名『美術1』日本文教出版、昭和56年、pp.22-23(筆者撮影)

図4 佐藤忠良ほか6名『少年の美術1』現代美術社、昭和56年、p.27(筆者撮影)

図5 佐藤忠良ほか三名『美術・その精神と表現 1』現代美術社、昭和59年、p.22(筆者撮影)

## 執筆者

川上 真由子(芸術資料館 学芸員)